

10  
緑

横浜の一〇年

公園面積は一・五倍に

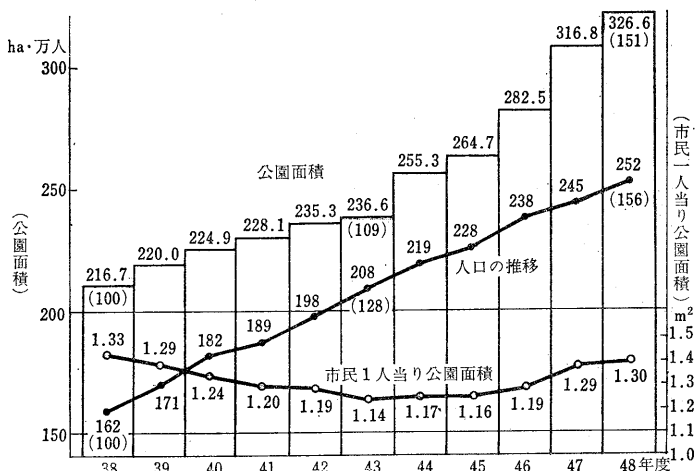
緑につつまれた美しい街づくりを進めるため、横浜市ではさまざまな制度や手法を活用して、都市の緑化対策が推進されてきた。

公園面積については、昭和四十八年度では三十八年度の約一・五倍に増加し、三二六・六ヘクタールに達したが(図—52)、市民一人当り面積では、急激な人口増加によりほぼ横ばいである(図—52)。

しかし、この間に、久良岐公園・本牧市民公園等の新しい公園が開設されたほか、大通り公園・こども自然公園・根岸森林公園・富岡総合公園等の大規模な公園の整備も進められている。また、児童公園も年間二〇数か所ずつ整備されてきた。

一方これとあわせて、緑地保存地区の指定・市民の森の設置・近郊緑地保全地区・風致地区等の制度が活用されるとともに、生産緑地として都市の農業の保護育成が図られている(図—54)。

図-52 人口推移と公園面積



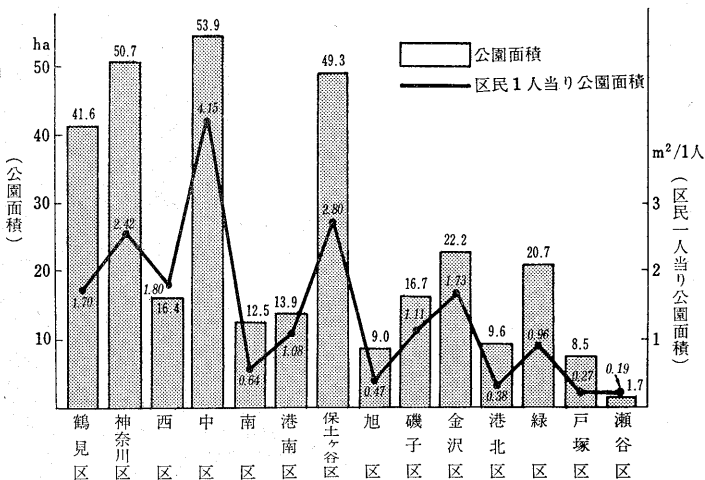
〔注〕 ①公園面積には市立公園のほか、県立公園2か所及び三溪園を含む  
②( )は昭和38年度を100とした指数

〔資料〕 緑政局



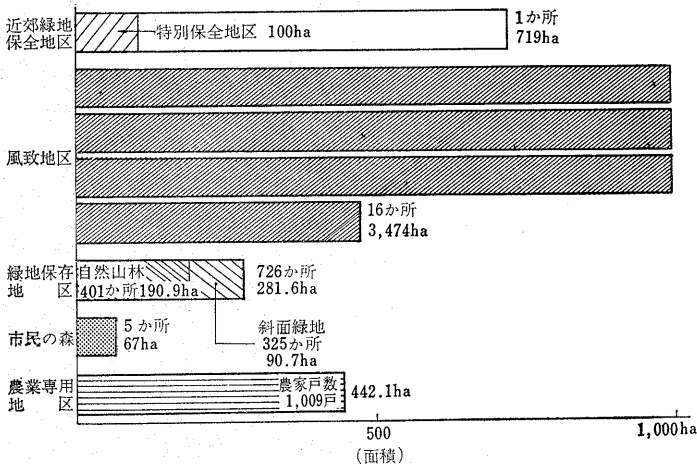
緑

図-53 公園面積区別比較 (昭和48年度末現在)



〔注〕 公園面積には市立公園のほか、県立公園2か所及び三溪園を含む  
〔資料〕 緑政局

図-54 緑地保存事業の現況 (昭和48年度末現在)



〔資料〕 緑政局